



右右右

佐澤太郎編纂 修

尋常小學第四

明治二十年六月廿日

文部省檢定濟

東京

文榮堂

尋常小學第四讀本上卷

目次

第一	運動	一丁	第十	鴉ノ話	八丁
第二	天智天皇	一丁	第十一	名邑	十丁
第三	虎	二丁	第十二	紀元節	十一丁
第四	油	三丁	第十三	日本ノ男兒	十二丁
第五	金巾	四丁	第十四	甘藷	十三丁
第六	輕氣球	五丁	第十五	寒暖計	十四丁
第七	仁德天皇	五丁	第十六	屋島壇浦ノ戰	十五丁
第八	寒暖	七丁	第十七	高山火山	十六丁
第九	支那文學	八丁	第十八	貨幣紙幣	十七丁

第十九	天満宮	十八丁	第二十七	湊川神社	二十六丁
第二十	孝心ナル猿	十九丁	第二十八	習慣性	二十七丁
第二十一	日本ノ旗章	二十丁	第二十九	抜刀隊ノ歌	二十八丁
第二十二	平清盛	二十一丁	第三十	湖水	二十九丁
第二十三	商標	二十二丁	第三十一	ガヨツト	三十丁
第二十四	地球ノ三帯	二十三丁	第三十二	象ノ話	三十一丁
第二十五	黄金銀	二十四丁	第三十三	産物ノ歌	三十二丁
第二十六	大河	二十五丁			

目次畢

尋常小學第四讀本上卷

第一 運動

人ハ動物ナリ、固ヨリ動キ働クベキモノ
 ナレバ、常ニ惰ラスシテ、運動スルヲヨシ
 トス、如何ナル清キ水モ、流レザレバ、終ニ
 腐リテ、蟲ヲ生ジ、如何ナルヨキ器械ニテ
 モ、久シク用ヒザレバ、澀リテ自由ナラザ
 ルベシ、故ニ、生レ付キ健カナル人ニテモ、
 運動足ラザレバ、身體虚弱トナリ、又平生

衛 澀 健 虚弱

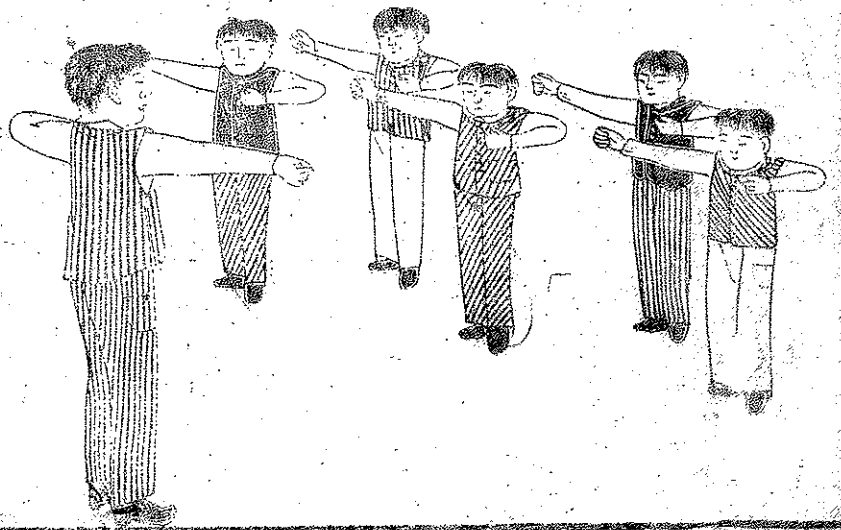
尋常小學第四讀本上卷

適宜

成就

弱キモノニテモ、日々
時間ヲ定メテ、適宜ニ
運動スレバ、身體遂ニ
健康トナルベシ、人若
シ強壯ナラザレバ、勉
強モ爲シ難シ、從ヒテ、
總ベテノ事業モ、成就
スルコトナカルベシ

第二 天智天皇



天智

皇極、蘇我

蝦夷、入鹿、協朝

政、擅

篡奪、謀

憤、藤原鎌
足、誅

興

勸、專

憐

天智天皇初め中大兄皇子と稱せられた
り、皇極天皇の御代に方り、蘇我蝦夷ふる
者、其子入鹿と、心を協せて、朝政を擅ふし、
終ニ篡奪を謀るに至れり、中大兄皇子之
を憤り、藤原鎌足と謀りて、蘇我父子を誅
せらる、其後、天皇の位ニ即かせ給ふニ及
び、盛ニ支那の文物を採り、學校を興し、禮
義を定め、器械の製作を勸め、専ら心を政
ニよせられ、臣民を憐み給へり、天皇の臣

庵苦

民を憐み給へる歌よ
秋の田代からほの庵の苦をあらみ我が
衣手は露にぬれつゝ

第三 虎

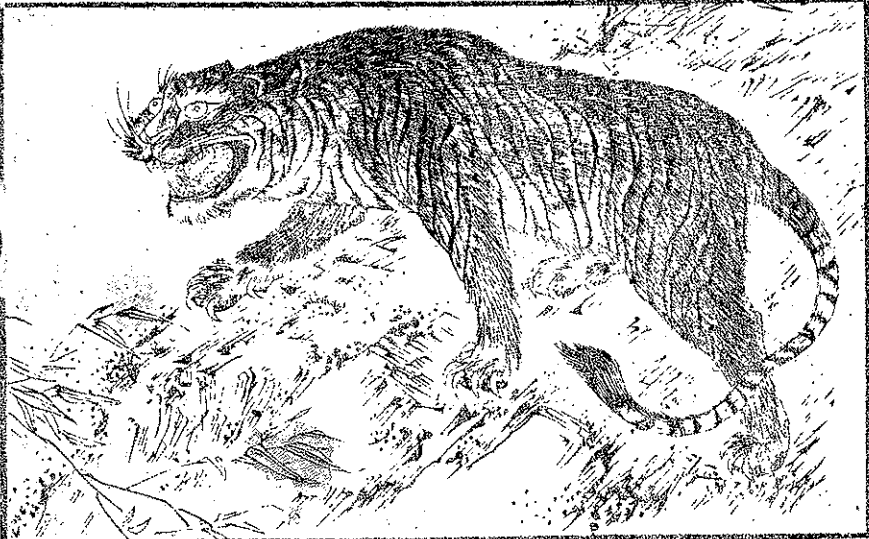
猛惡

虎ハ形猫ニ類シテ性質猛惡ナリ其最モ
大ナル者ニ至リテハ高サ三四尺ニシテ
長サ八尺ニ餘ルモノアリ目ハ暗キ所ニ
テモ亦能ク輝キ牙ハ尖リテ爪ハ鋭ク尾
ハ長ク脚ハ短シ毛色ハ赤黄ニシテ黒キ

脚尖

斑紋腹部

敷物



斑紋アレドモ腹部ハ
白シ常ニ森林廣野ニ
棲ミテ動物ノ肉ヲ食
トス故ニ之ヲ肉食動
物ト云フ印度地方ニ
最モ多ク支那朝鮮等
ニモ亦産ス其毛皮ハ
最良ノ敷物トナスベ
シ

第四 油

油ハ、人世に必要なる品トシテ、其種類を大別すれば、動物性、植物性、礦物性の三種あり、動物性の者ハ、鯨、海豹、鰵、鮪等より採りたる油ナリ、植物性のものハ、菜種、胡麻、荏、胡、薄荷、荷、礦物性の者は、地中より湧き出づる油トシテ、所謂石油は、これより製したるものナリ、油は、斯くの如くに、其種類多くシテ、用方一

鯨、海豹、鰵、鮪、菜種、胡麻、荏、薄荷、荷、礦物

醫藥 運轉、滑 結髮、用途

様ならず、或は食用ト供し、或は燈火ト用ひ、或は醫藥ト供し、或は種々の製造に用ひ、或は以テ器械の運轉を滑トし、其他女子の結髮ト用ふる等、其用途頗る多シ

第五 金巾

機械 仕掛 打綿

金巾ハ、機械ニテ織リタル、外國製ノ木綿ナリ、此機械ヲ動カスニハ、蒸氣ノ力ヲ用フ、其仕掛甚ダ巧ナリ、初メ實綿ノマ、機械ニ掛クレバ、機械ハ、其實ヲ去リ、打綿ト

變

英吉利獨逸合衆國

智慧

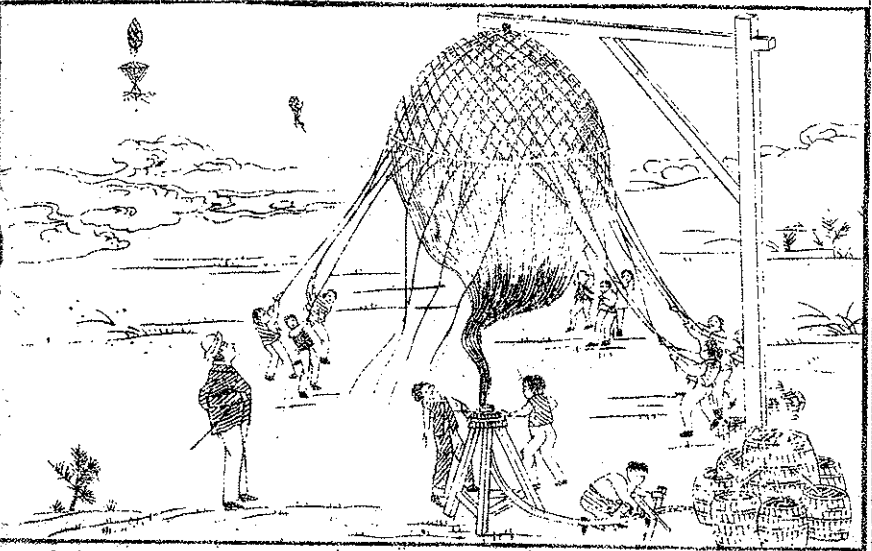
シ打綿忽チ糸トナリ、又變ジテ金巾トナル、斯クノ如ク、巧ナル機械ヲ用フルハ、外國ノ中ニテモ、英吉利獨逸亞米利加合衆國等、其名最モ高シ、又其綿ハ、多ク印度ヨリ買フモノナリ、斯ル機械ハ、皆學問ト智慧トヲ以テ、人ノ考ヘ出ダシタルモノナリ、故ニ、汝等モ常ニ勉強シテ、遂ニハ、便利ノ機械ヲモ發明スルニ、至ランコトヲ心掛クベシ

第六 輕氣球

空氣より輕きものを、必ズ、空氣の上に昇ること、猶水より輕たもの、水面に浮ぶがごとし、風船一名輕氣球ハ、此理よりて、製したる者なり、其製法は、織目の密なる絹の囊

輕氣球

織目密囊



尋常小學科

第五百四十一

五

豫洩

網 繫 空際

1.ゴムを塗りて、豫め内氣の外より洩るを
を防ぎ、次に空氣より輕き氣を之より充た
し、其外面に網をめぐらし、網の下に多
くの繩を附けて、小船の如きものを繫ぐ
事、人々に乗る時、高く空際より昇り得
る。

第七 仁徳天皇

高臺炊烟

仁徳天皇ハ、浪華ニ都シタマヒケルガ、或
日、高臺ニ登リテ、人家ノ炊烟稀ナルヲ見

課役

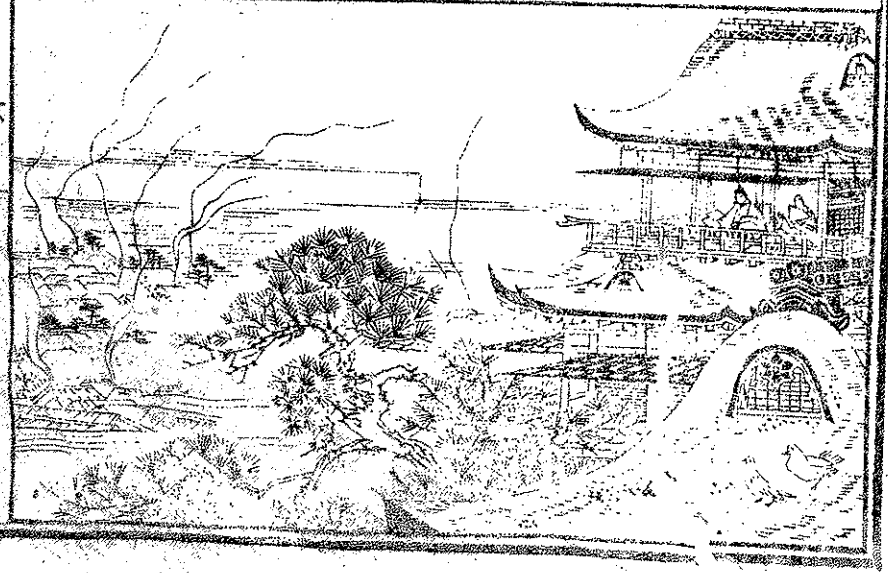
躬

節儉

歡聲

盈

タマヒ、民ノ貧キヲ知
シメシ、詔シテ課役ヲ
除クコト、三歳躬自ラ
節儉ヲ行ハセタマフ。
是ヨリ、風雨時ニ順ヒ、
五穀能ク熟シ、三年ニ
シテ、民大ニ富ミ、歡聲
路ニ盈テリ、天皇、マタ
高臺ニ登リ、炊烟ノ盛



朕
憂皇后
漏敝

ニ起ルヲ見タマヒ、大ニ喜ビテ宣ハク、朕
既ニ富メリ、復何ヲカ憂ヘント、皇后宣ハ
ク、今、宮中屋漏リ、衣敝ル、ナンゾ富メリト
イハント、天皇宣ハク、君ハ民ヲ以テ本ト
ス、民ノ富メルハ、即チ朕ノ富メルナリト、
後人之ヲ頌シテ詠メル歌アリ
あかき屋に登りて見れば、煙多つ、民のか
まどは、にぎはひにけり
今日ニ至ルマテ、此大御代ノ御仁徳ヲ仰

頌詠

第八 寒暖

ギ頌セザルモノナシ

感
體温
茶碗

冬の寒さを感じるは、周囲の空氣冷ゆる
が爲めに、我が體温を奪ひ去るよ由る、故
に、空氣愈冷ゆれば、體愈寒し、其理は、湯を
盛りたる茶碗を、冷水の中に入るれば、其
湯忽ち冷ゆる、亦同じ、夏の暑さを覺ゆる
は、周囲の空氣熱くして、我が體温の散逸
を妨ぐるに由る、其理も、湯を盛りた

る茶碗を熱湯の中に入れて、その湯の冷えざるがごとし、衣服は、此寒暑を身よ程よくするものなれば、冬は、多く衣服を著て、冷なる空氣の、我が體温を奪ひ去るを防ぐ、其理は、冬日、飯櫃を蒲團などよ包みて、飯の冷ゆるを防ぐよ均し、又夏は、薄き衣服を著し、體温をして、自由よ散逸し得べからしむ、され、猶室内の暑熱甚しき時、窓戸を開きて、熱き空氣の散逸を自由

飯櫃蒲團

散逸

よをるがぶとー

第九 支那文學

應神

我が國ニテ、支那文學ノ始マリシハ、應神天皇ノ時ナルベシ、天皇ノ御代ニ方リ、高麗ヨリ使ヲ遣シ、上表シテ、朝貢セシカバ、

高麗朝貢

菟道稚郎子

皇太子菟道稚郎子之ヲ讀ミ、表中ニ無禮ナル言語アリシヲ以テ、大ニ怒リ、使者ヲ責メテ、表ヲ破レリ、此時代ハ、百濟ヨリ始メテ漢字ヲ持チ来リテ、未ダ久シカラザ

責百濟

教授備
阿直岐王
仁

咎篤
想像

溪
將
鴉渴堪

レバ、教授河津備ハラザルハ、因ヨリナリ、然ルニ、皇太子ハ、阿直岐王仁ナド云ヘル、學者ニ就キテ學習シ、今表ヲ讀ミ、其無禮ヲ咎ムルニ至レリ、勤學ノ篤キコト、實ニ想像スルニ足ルベシ

第十 鴉ノ話

或る夏、一ヶ月許の間、雨降らず、溪川も水盡きて、草も木も、將に枯れんとす。時に、一羽の鴉あり、渴し堪へぬて、水を求むれ

遙
水瓶
覗
狭
嘴
思案頓

ども、一滴も得る處と能はず、尚求めて止まざりけるに、遙より一つの水瓶ある哉見て、飛び行き、覗きて見れば、水ありされども、口狭く水少くして、己が嘴、其水は届かば、暫く思案の體（ふりし）頓



幾回啄

忍耐

徒

て幾回と云ふは、小石を啄み来りて、瓶の中
まわれぬれど、瓶中の水は、漸く満ち上り、
之を飲みて、其渴を免るゝことを得たり
とぞ、此鴉の水を飲み得しは、智慧ありて
且つ忍耐の力つよきより、由れり、たとひ瓶
中に水あるも、之を飲むべき工夫をせず、
又石を運ぶとも、忍耐の力なくして、水の
瓶口より満ち上るゝに至らざれば、徒に勞して、
渴を免るゝ事能はざるべし

第十一 名邑

我が國、三府五港ノ外ニ、尚名邑數多アリ、
尾張ノ名古屋ハ、東海道ノ要路ニ當リ、物
貨輻湊シテ、市街ノ繁華ナルコト、三府ニ
亞ゲリ、加賀ノ金澤ハ、北方ノ大都會ニシ
テ、運輸便ニ、街市繁盛ナリ、何レモ、人口十
万以上アリ、安藝ノ廣島ハ、中國第一ノ都
會、阿波ノ徳島ハ、四國第一ノ都會ニシテ、
和歌山ハ、紀伊ノ都會タリ、陸前ノ仙臺ハ、

名古屋

物貨

金澤

廣島

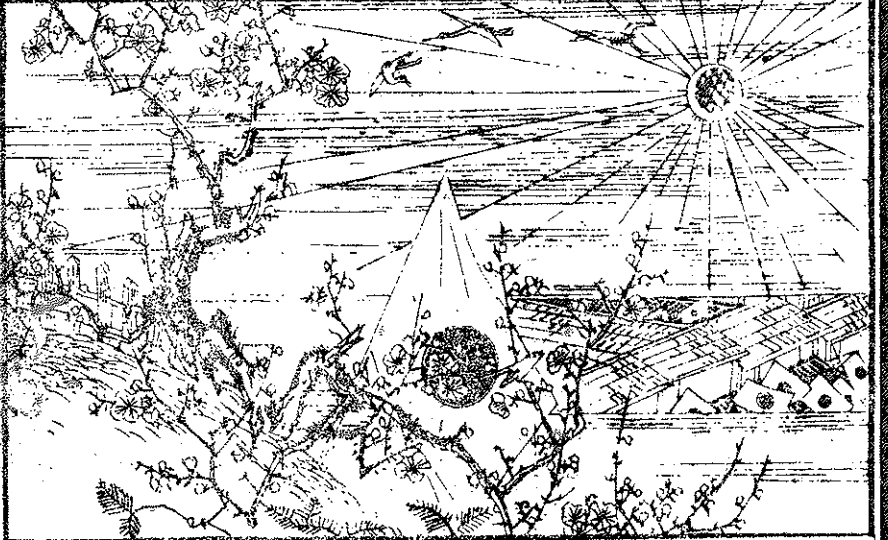
徳島

和歌山、仙臺

福岡
熊本
佐賀
萩鳥取
堺、靜岡
弘前、福井
富山

奥羽第一ノ都會ニシテ筑前ノ福岡肥後ノ熊本薩摩ノ鹿兒島ハ西國ノ大都會タリ、皆人口五万以上アリ、其他土佐ノ高知、讃岐ノ高松伊豫ノ松山肥前ノ佐賀長門ノ萩備前ノ岡山出雲ノ松江因幡ノ鳥取和泉ノ堺駿河ノ靜岡陸中ノ盛岡羽前ノ米澤羽後ノ秋田陸奥ノ弘前越前ノ福井越中ノ富山何レモ人口三万以上アリテ繁盛ナル都會ナリ

條 舞
良辰
紀元節



第十二 紀元節
春風條を鳴らさざ鶴
ハ空に舞ひ梅ハ園中
に開けり今日ハ是何
の良辰ぞ二月十一日
にして紀元節なり紀
元節とは神武天皇の
天位より即かせたまへ
る歲月より千萬世の

高千穂

互侵

親

吉備

紀元と定められたるものなり、神武天皇ハ、人皇初代此帝にして、初め日向高千穂の宮に坐まるとき、東國未だ王化し順はず、互に土地を争ひ侵し、良民を害するを以て、天皇親ら師をひきゐて、東征せられ、筑紫安藝吉備越えて、浪速しつゝせたまひ、從ふものを之れゆるし、拒ぐものは之を討ち、河内紀伊等を平げ、漸く進みて、大和に入り、多留ふ、天皇師を起してより、

統一

檀原

帝業

窮

秀

塵芥

六年にして、遂に海内を統一し、都を大和檀原に定め、天皇此位し、即ち我が國萬世の帝業を開きたまふ、是より君臣上下の分定りて、天地と共に窮りなし

第十三 日本の子

太平洋の西のはて、一つの島あり、土地廣く、山河秀づる、其中より生れし男兒は昔より心し持てる忠と孝、身は父母のたまものと、思へど君と國の多免、捨つる時よハ塵芥

五層

今太平の御代あり 農工商の業開け
 貧しき家も生るとも 其一身のはたらきに
 千町ちまちの田畠も得らるべく 五層の家も築くべし
 巨萬のたからと積み重ね 富有の人ともなりぬべし
 此幸福を保つよは 忠と孝とを本として
 我が天皇に能く仕へ 各家業も勉強し
 私の利とむさばらず 全國の利と考へて
 世界の人よ親切と つくすぞ國の譽れなり
 若し事ある其時ハ 日本男兒の木色の

親切譽

奮

惜

憶病嘲

甘藷

成熟洪水
暴風災

人よ屈せぬ勇氣とば 奮ひ起して義と守り
 天皇の爲め國の爲め 身命惜まざ進み行き
 日本男兒ハ憶病と 嘲けらるるを笑はるふ
 第十四 甘藷
 甘藷ハ琉球ヨリ薩摩ニ傳ハリ初メハ其
 地方ニノ植エタリ故ニ琉球芋ト云ヒ
 或ハ薩摩芋ト云フ今ハ全國大抵之ヲ植
 エガル所ナキニ至レリ此芋ハ土中ニテ
 成熟スルモノナレバ洪水暴風等ノ災ニ

凶年饑歲患

遇フトモ其害ヲ被フ
ルコト穀物ノ如クニ
甚シカラズヨク栽培
スレバ凶年饑歲ノ患
ヲ免ルベシ其作り方
ハ三月ノ頃先ヅ其塊
根ヲ苗床ニ伏セ置キ
五月ニ至リ新芽ノ五
六寸ナルモノヲ切り



塊根苗床

蔓延

肥

煨澱粉

釀

小笠原

利益

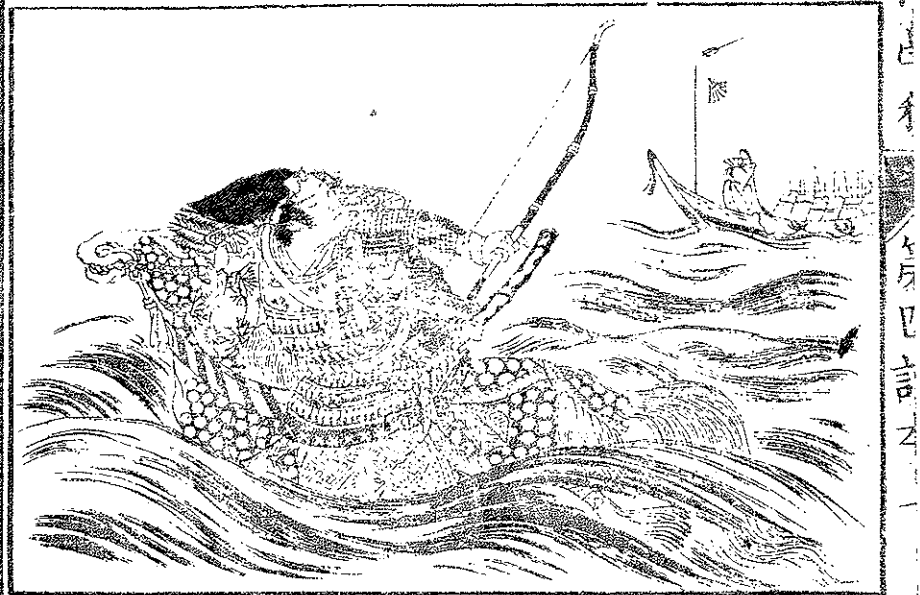
取り畑地ニ移シ植ウレバ漸ク蔓延シ塊
根ヲ生ジテ成熟スルナリ其塊根ハ肥リ
テ色ハ白赤ノ二様アリ味甚ダ甘美ナリ
之ヲ蒸シ又ハ煨キテ食フベシ或ハ澱粉
ヲ取り或ハ酒ヲ釀シ味噌醬油等ヲ製ス
ベシ又小笠原琉球等ノ諸島ニ於テハ平
常ノ食料ニ供ス世人ニ利益ヲ與フルコ
ト最モ多キモノナリ

第十五 寒暖計

物の温度を試むるには、寒暖計を用ふ、寒
 暖計ハ細長きガラス管の一端を球形の
 管 著色 密閉 盛りたる後、其上端を密閉して、俟て、度数
 と記し、あるものなり、管中の水銀は、時候
 収縮下降 寒冷なる時、収縮して下降し、時候温暖な
 膨脹上昇 する時、膨脹して上昇す、水銀の昇降より
 て、寒暖の度を計ることを得るなり
 攝氏 寒暖計は、三種あり、各其度を異よ、攝氏

氷點沸騰 點 列氏 華氏 從來 屋島 宗盛、安德、
 の製は、氷點と零度とし、沸騰點と百度と
 す、列氏の製は、氷點と零度とし、沸騰點と
 八十度とす、又華氏の製は、氷點と三十二
 度とし、沸騰點と二百十二度とす、我が國
 まては、從來華氏の製を用ひしが、今ハ攝
 氏の製を用ふることをなれり
 第十六 屋島壇浦ノ戰
 源義經ノ平氏ヲ屋島ニ攻ムルヤ、火ヲ放
 チテ行宮ヲ焚ク、平宗盛等、安德天皇ヲ奉

浮 諸軍 距 衆那須 高宗 騎



諸船ニ乘リテ海ニ浮
 ブ、諸軍皆之ニ從テ陸
 ヲ距ルコト五十歩、扇
 ヲ竿ニ挿ミテ、之ヲ射
 レト云フ、義經射ル者
 ヲ求ム、衆皆言フ、那須
 宗高ニ在ント、乃チ命
 ジテ之ヲ射ラシム、是
 ニ於テ、宗高馬ニ騎リ、

扇轂 翻墜 追擊壇浦 知盛 虜

出デ、一發セシニ、誤ラズシテ、扇轂ニ當
 リ、扇翻リテ海中ニ墜チシカバ、兩軍大ニ
 呼ベリ、平氏又天皇ヲ奉ジテ、長門ニ走ル、
 義經追擊シテ、大ニ平氏ノ軍ヲ壇ノ浦ニ
 破ル、平知盛以下、皆海ニ投ジテ死シ、宗盛
 ハ虜トナル

第十七 高山火山

我が國にて、最も高き山ハ富士山にして、
 駿河甲斐ヲ跨ル、高さ直立一千二百三十

浮舟ノ事 高日賣下上 共

倒 七丈あり、其形は扇を開きて倒する心
 姿 のゝ如し、何處より望むも、同じ姿よて、頂
 頂上積雪 上には積雪絶ゆることなし、富士山より次
 乗鞍、赤石 ぐものへ、信濃、飛騨の乗鞍嶽、信濃の赤石
 霧島、後方 山、甲斐の白根山等にして、其他、下野の日
 羊蹄、飯豊 方、羊蹄山、羽後の鳥海山、岩代の飯豊山、伊
 石槌 豫の石槌山、伯耆の大山、陸奥の岩木山等
 ハ、高山なり

噴火 噴火山ハ地中の火氣立ち并りて、山より
 火烟と噴き出だすものなり、信濃の淺間
 温泉、阿蘇 山、肥前の温泉、岳、肥後の阿蘇山、薩摩の櫻
 島等あり

第十八 貨幣紙幣

貨幣ニ金銀銅ノ三種アリ、皆政府ノ發行
 スル所ナリ、黄金ニテ製スルヲ金貨トイ
 フ、二十圓十圓五圓二圓一圓ノ五種アリ、
 銀ニテ製スルヲ銀貨トイフ、一圓五十錢

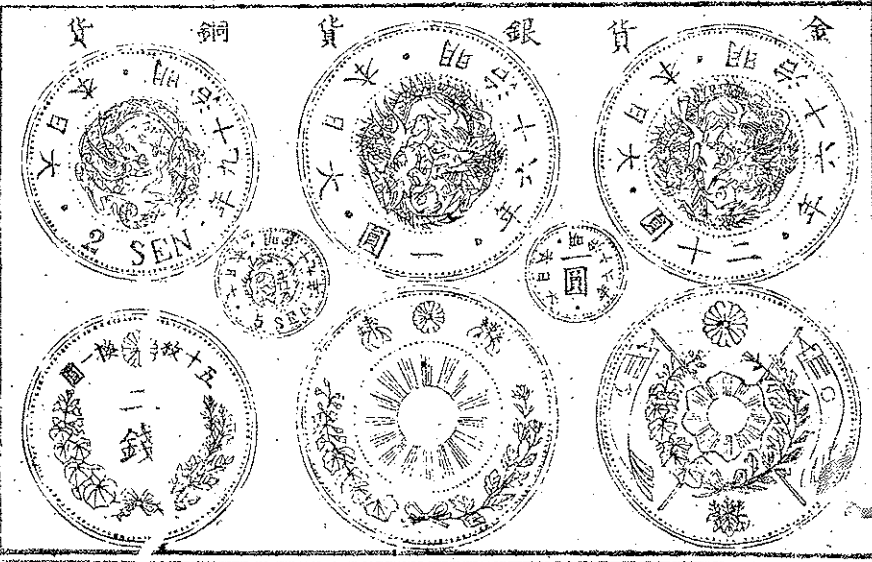
貨幣政府發行

日本書紀卷之八十四

七

紙幣
許可
税關

二十錢十錢五錢ノ五種アリ、銅ニテ製スルヲ銅貨トイフ、二錢ニ錢半錢ニ釐ノ四種アリ、又紙幣ニ二種アリ、一ハ政府ヨリ發行シ、一ハ政府ノ許可ヲ得テ銀行ヨリ發行ス、銀行紙幣ハ、税關ニ納ム



公債

ル税金ト、公債ノ利子トニハ、用フルコトナシ

第十九 天滿宮

天神又天滿宮ハ、京都の北野并に筑前の太宰府祀、始めこゝて、諸國大抵之と祀ら管原道真さるはふし、これ管原道真と祭れる社奉崇敬是善り、斯く諸人し、崇敬せらるゝ道真ハ、是善の子し、よして、幼き時より、學問と好み、政務し、練達し、博學し、高德しと稱せられ、人々

練達博學
高德

宇多、擢醍醐

忠誠

綜理、裁決

嫉

讒奏、權帥

慕

嘗、重陽詩

り、宇多天皇擢んで、大に之を用ひ、醍醐天皇に及び、右大臣とし、藤原時平を左大臣とす、道真ハ、君ヲ仕ふるハ、忠誠を盡し、諸政を綜理して、裁決流るゝ。お如し、時平、己の遠く及ばざるを知りて、深く之を嫉み、遂に讒奏せしかば、太宰權帥を貶せらる。太宰府に至り、門を閉ぢて出でず、益心と國家を存して、君を思ひ慕ふこと息まらず、嘗て重陽に當り、詩を賦して、曰く

去年今夜侍、清涼秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣猶在此、捧持每日拜餘香。

文墨、薨

罪

と、唯文墨と事とし、三年小して遂に薨す。後、其罪なきこと明なるに至り、太政大臣正一位を贈られ、今尚官幣社に列せり。

第二十 孝心ナル猿ノ話

昔信濃ノ或ル山里ニ、一獵夫アリ、冬ノ日、獵ニ出デタルニ、日ヲ終ルマデ、一ノ獲物ナクシテ、空シク歸ル時ニ、大木ノ上ニ、大

獲物

鉄砲

ナル猿ノ居ルヲ見テ、
鉄砲ヲ以テ之ヲ打チ
雷人、我が家ニ持チ歸
リシガ、其夜ハ、寒ニ寒

凍 剝 爐 宵

シ、凍リテハ、翌日皮ヲ
剝グニ、ヨカラジトテ
爐ノ邊ニ掛ケ置ケリ、
夜ノ更ルニ及ビテ、睡
リノ覺メシ時、宵ノ間



埋怪

ニ埋メ置キシ爐火ハ、ホノメクヲ見テ怪
シニ、ヨクヨク之ヲ見レバ、數匹ノ兒猿來
リテ、代ル代ル、爐火ニテ、己ガ手ヲ煖メ、親
猿ノ體ニ、コレヲ當テ、煖メ居レリ、蓋シ
親猿ノ死シタルコトヲバ、知ラズシテ、凍
エタルモノト思ヒシナラン、獵夫コレヲ
見テ、坐口ニ哀ヲ催シ、獸類スラ尚、親ヲ思
フコト、斯ク切ナルカト深ク感シテ、其後
ハ、己ガ母親ニ、甚ダ孝養ヲ盡セリト云フ

蓋

哀催

第二十一 日本国旗章

遙の沖を走り行く 船はしづくの船なるか
 旗のしるしは白布に 旭の形をあらはせむ
 是ぞ亞細亞の東端に 名を知られたる日本國
 東よあまは亞細亞中 さまに旭の照を故
 古く其名も日本を 旗も旭を用ひたり
 世にたる品は何よても 日光うきて育つなり
 鳥や獸も人々も 草木の枝葉茂るのみ
 物明かに見ゆるのも 皆日の光よよれるなり

されむ旭乃旗旗立つ 國の生れし人々を
 物つをうだし又物の すぢみちきへも明かに
 わきまよか國人よ わきまよか其國全

第二十二 平清盛

忠盛保元 平清盛ハ忠盛ノ子ナリ保元ノ亂ニ源爲
 義ヲ討チテ之ヲ敗リ平治ノ亂ニ其子義
 朝ヲ滅セリ功勞多キヲ以テ官ヲ進メ遂
 ニ太政大臣ニ陞レリ長子重盛ハ左近衛
 大將トナリ一族ノ朝官トナル者六十餘

義朝 滅功勞 重盛 朝官

領地

暴戾

震

人其領地ハ全國ノ半ニ居リ、政令ヲ擅ニシ、暴戾ヲ極メシカバ、内外之ヲ苦しミ、平氏ヲ滅サンコトヲ謀リシモノアリ、以仁王ノ令ヲ下スニ及ビテ、源賴朝兵ヲ擧ゲシニ、諸國ノ源氏皆之ニ應ジ、軍威大ニ震ハリ、清盛聞キテ大ニ怒リ、大軍ヲ發シテ、賴朝ヲ討タシメシニ、平氏ノ軍大ニ敗ル、清盛適熱病ニ罹リテ薨ズ、是ヨリ平氏漸ク衰ヘテ、遂ニ源氏ノ爲メニ亡ボサレタ

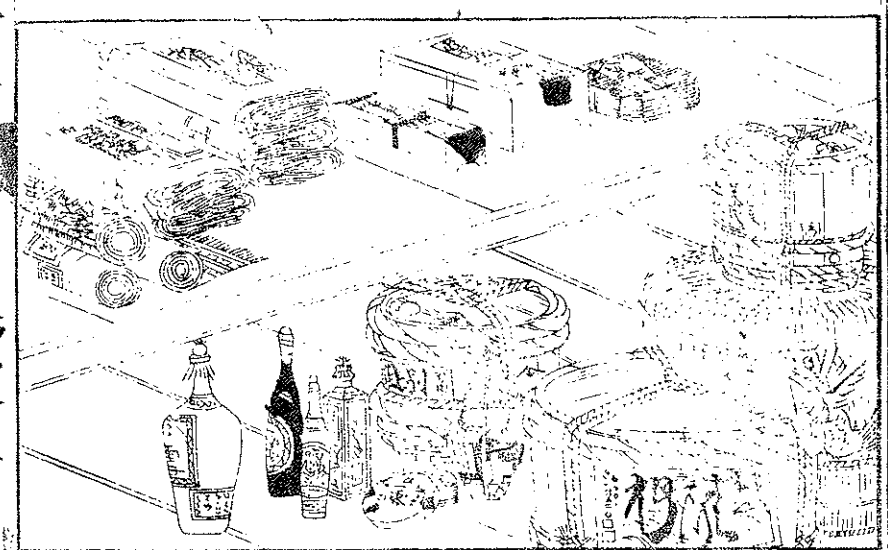
數段

模様

貼

商標

目印



第二十三 商標

爰に數段の織物あり、又酒樽醬油樽などあり、皆美麗なる模様を畫ける片紙を貼れり、之と商標と名づく、即ち商品の目印なり、これ賣るものは自家の

源氏物語 第四十卷

偽造

省

紛

製造品なることを示し、且つ、他の偽造を
防ぎ、買ふものも、此商標に據りて、品物を
改むるの勞と省く、双方の便利少からざ
るものなり、此商標を定むるより、他の商
標と紛まざる、模様を選び、政府の許可を
得て、之と世上より、公告するなり

第二十四 地球ノ三帶

廣キ世界ノ中ニハ、春夏秋冬ノ別ナク、常
ニ我が國ノ寒中ヨリモ、尚甚ダ寒キ國ア

寒帶

蘚苔

布帛

リ、是ハ寒帶トテ、地球ノ南北ノ端ニ近キ
所ニシテ、樹木ヲ生ゼズ、唯蘚苔ノ類アル
ノミ、獸類モ、白熊ナド數種ノ外ハ、産スル
コトナシ、サレバ、家屋ヲ作ルベキ用材ナ
ク、衣服トスベキ布帛ナク、僅ニ獸皮ヲ著
テ、穴ニ住ミ、獸類ヲ捕リテ、之ヲ食フニ、過
ギザルベシ、又春夏秋冬共ニ、我が國ノ暑
中ヨリ、熱キ國アリ、是ハ熱帶トテ、地球南
北ノ中央ニ位スル處ニシテ、草木繁茂シ、

毒蛇、巨蟒、鳥獸多ク、毒蛇、巨蟒亦多シ、人畜其害ヲ蒙

蒙、此地方ニ住マル人ハ、概ネ開化ニ遠ク、
裸體耕作、男女裸體ヲ常トシ、多クハ、耕作ヲ務メズ

ト云フ、又我が國ノ如クニ、夏モ甚ク暑カ
ラズ、冬モ甚ク寒カラズシテ、凌ギ易ク、住

ミヨキ國ヲ、溫帶ト云ヒ、又寒暖適度ノ國
ト云フ

第二十五 黄金銀

黄金ハ、其質密トシテ、甚ク重シ、黄色ト帶

光澤

びて、美麗ナル光澤あり、久しく水中トあ
るも、空氣ト觸ル、も、其色澤と失ふ事と
ナシ、礦山より出るものと、山金と云ひ、河
水の沙中より、得るものと、砂金といふ、銀
も、皆礦山より出づ、白色トシテ、光澤あり、
黄金ト次ぎて、質の密ナルものナリ、され
ども、硫黄の氣ト觸ルまを、忽ち暗黒色ト
變ぢ、故に、硫黄と含める食物と、銀器ト盛
る時を、其色と變ぢるナリ、純粹の金銀ト

暗黒色

純粹

柔軟

質極めて柔軟なり、故
一、細工等一用ふるは、
少量の銅を加へて、
其質を堅くす。我々の國
の金貨も、其量十分一
の銅と和を、一圓銀も、
亦同上、但五十錢以下
の銀貨も、之より十分二
の銅と和す。



第二十六 大河

我が國ハ地形細長キヲ以テ、外國ノ如キ、
長流ノ大河ナシ、古來、我が國ノ三大河ト
稱スル者ハ、利根川、木曾川、信濃川ナリ、其
レド、石狩川ヲ以テ、最モ大河トスコレハ、
北海道石狩ニアリ、利根川ハ、又阪東太郎
ト稱ス、上野ヨリ發シテ、上野武藏ノ間ヲ
流シ、次ニ、下總常陸ノ境ヲ過キテ、東海
ノ境ニ注ギ、又其分流ハ、東京灣ニ注グ、木曾川ハ

利根、木曾、
信濃、
石狩、
阪東

境

繞

信濃ヨリ發シ、美濃尾張ノ境ヲ繞リテ、伊

貫

勢海ニ入ル、信濃川ハ、信濃ヨリ出テ、越

舟楫

後ヲ貫キ、北海ニ入ル、以上ノ諸川、何レモ、

漁網

舟楫ニ便ニシテ、灌漑ニ利アリ、又漁網ノ

利少カラズ、其他、山城攝津ノ淀河、駿河ノ

富士川、陸中陸前ノ北上川、遠江駿河ノ大

天龍千歲

井川、遠江ノ天龍川、筑後ノ千歲川、一名筑

紫二郎、四國ノ吉野川、一名四國三郎、羽前

最上米代

ノ最上川、羽後ノ米代川、岩代ノ逢隈川、石

郷舟運

見ノ郷川等、皆著名ニシテ、又舟運灌漑ノ
利多シト云フ

第二十七 湊川神社

湊川楠正

湊川神社ハ、攝津湊川ニ在リ、楠正成ヲ祠

別格官幣

ル別格官幣社ナリ

豪族笠置

正成ハ、河内ノ豪族ナリ、後醍醐天皇ノ笠

召

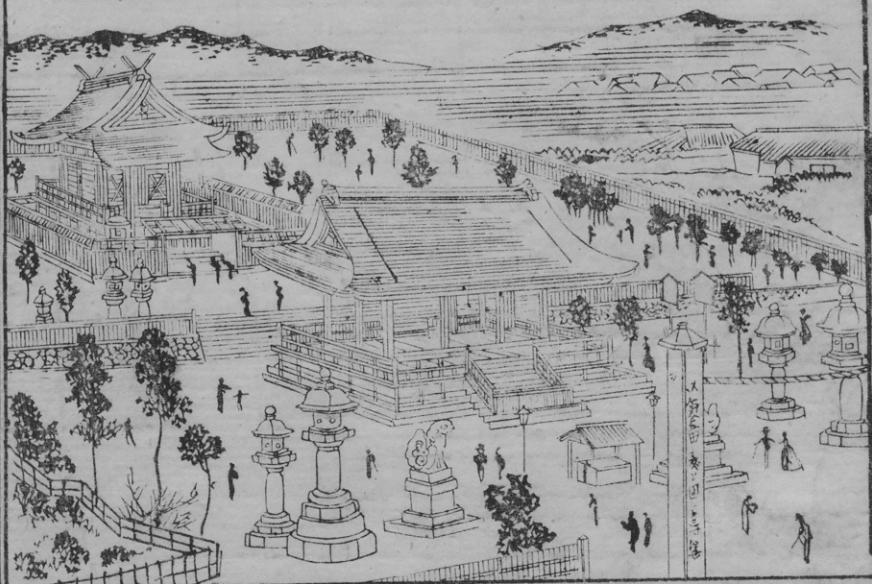
置ニ逃レ給ヒシ時、正成ヲ召シテ、賊ヲ討

策奇計

ツノ策ヲ命ゼラル、正成、屢奇計ヲ以テ、賊

軍ヲ破ル、諸國ノ武士、風ヲ望ミ、並ビ興リ

北條高時 還幸 足利尊氏 犯 新田義貞



天官軍ニ應ジ遂ニ京師ヲ復ス是ヨリ先キ北條高時天皇ヲ隱岐ニ遷シ、ガ此ニ至リテ天皇京師ニ還幸セラル、其後足利尊氏謀反シ進ミテ京師ヲ犯ス、天皇復笠置ニ幸セラル、正成、新田義貞等

貞

遺訓

直義

德川光國

碑

刻

德利

ト尊氏ヲ討チ、屢戰ヒテ尊氏ヲ破ル、尊氏逃レテ西國ニ走レリ、既ニシテ尊氏ノ再ビ東上スルニ及ビ、正成其子正行ヲ召シテ遺訓シ、河内ニ還ラシメ、自ラ出デ、湊川ニ赴キ、尊氏ノ弟直義ヲ防ギテ戰死セリ、後、德川光國其跡ニ碑ヲ建テ、嗚呼忠臣楠子之墓、ノ七字ヲ刻セリ

第二十八 習慣性

口ノ廣キ德利ニ、薄キ板ヲ載セ、其上ニ貨

新田義貞傳 第四節

彈 幣ヲ置キテ、急ニ板ヲ彈ケバ、板ハ飛ビ去

レドモ、貨幣ハ止マリテ、德利ノ内ニ落チ
ンコレ板ノ急ニ飛ブガ故ニ、貨幣ハ之ト

共ニ動クコト能ハザルニ因レリ
靜止セル舟車ノ、急ニ動ク時、人身ノ、後ニ

倒レントスルモ、亦前ト同一ノ理ニテ、人
身ハ、靜止シテ直ニ動カザルニ由ル、又進

行セル舟車ノ、俄ニ止マル時、人身ノ、前ニ
倒レントスルハ、運動セル物ノ、俄ニ止マ

俄

靜止

到底

ルコトヲ得ザルニ由ル、凡ソ靜止セル體
ハ、物アリテ、之ヲ動カスニアラザレバ、到
底動クコトナク、運動セル體ハ、物アリテ、
之ヲ支フルニアラザレバ、決シテ止マル
コトナシ、萬物皆然リ、之ヲ名ヅケテ、物ノ

習慣性

習慣性ト云フ

第二十九 拔刀隊の歌

前と望めば劔なり 右も左も皆劔
劔の山よ登るのは 未來の事と聞つるに

罪業

此世よ於て面たり 劔の山よ登るのも

我が身のなせる罪業哉 滅をために非ざして

征伐

賊を征伐をるがため 劔の山も何のその

敵の亡ぶる夫を迄は 進めや進め諸共に

玉散覺悟

玉散る劔抜き連れて 死をる覺悟で進むべし

其二

閃電

劔の光り閃めくは 雲間よ見ゆる電か

砲聲轟

四方よ打ち出ま砲聲の 天よ轟くいかづちか

碎魂

敵の又よ伏ま者や たまたに碎けて魂の緒の

屍

絶を果て死せる身の 屍を積みて山哉ふ

其血は流まて川哉ふを 死地よ入るのも君の爲め

敵の亡ぶる夫を迄は 進めや進め諸共に

玉散る劔抜き連れて 死をる覺悟で進むべし

第三十 湖水

琵琶

近江ノ琵琶湖ハ本邦第一ノ大湖ニシテ

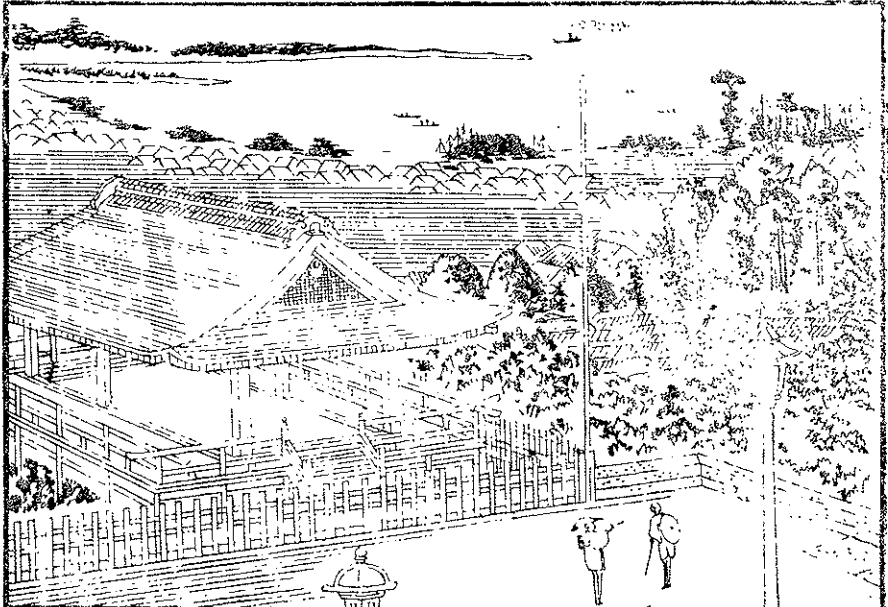
南北十五里周回七十三里アリ其形ノ琵琶

二似タルヲ以テ斯ク名ヅク湖中ニ四

竹生著沿

島アリテ竹生島最モ著ル沿岸ノ風光殊

三井晚鐘
比良暮雲
粟津晴嵐
霞浦
宍道
八郎瀉



二佳ニシテ、三井ノ
晚鐘、比良リ暮雲、粟
津ノ晴嵐等ハ景ノ
勝アリ、霞浦ハ本邦
第二ノ湖水ニシテ、
常陸ニアリ、其周回
三十六里ナリ、其他
出雲ノ宍道湖、羽後
ノ八郎瀉、岩代ノ猪

猪苗代諏訪

苗代湖、信濃ノ諏訪湖等、何レモ本邦著名ノ湖水ナリ

第三十一 ガヨット

佛蘭西

佛蘭西の都府マルセルよ、ガヨットと

非常節儉

云へる老人あり、非常よ節儉して、數万の

罵

富をなせり、然るよ土地の者ハ、皆相罵り

貪慾

て、貪慾の老人なり、と云ひ、お、或る日ガ

ヨットは、其土地の人々を招きて、マルセ

貧困

ール人の貧困なるは、井水不良よして、飲

貯水樋

餘命

料も適せば他所より之を買ひ入るゝよ
由る余が六きまで非常な節儉して金と
貯へーは數多の水樋を作り水を引きて
郷人の費用を省ふ人が爲めなま余今年
老いて餘命なしこれより自費を以て郷
人の爲めな水樋を造らんと言ひーかば
常は罵りし人々は大笑に耻ぢたりとぞ善
く積みて善く散ずとハ此等の類を謂ふ
なり

象

頸鼻

怨

裁縫店

第三十二 象ノ話

象ハ陸ニ棲ム獸ノ中ニテ最モ大ナルモ
ノナリ亞非利加又ハ印度ニ産ス頭ハ大
ニシテ耳ハ長ク目ハ小ク頸ハ短シ鼻ハ
極メテ長クシテ其端自在ニ働クコト殆
ド人ノ手ノ如シ象ハ元來ヨク人ニ馴ル
ルモノナレドモ怒レバ時ヲ待チテ其怨
ヲ報ユルコトアリ外國ノ或ル處ニ一ノ
裁縫店アリ數多ノ縫工ヲ雇ヒテ衣服ヲ

縫臺

針

路傍汚水

含

讐

製之居タリシガ、或ル日、象アリテ市中ヲ
 行步シ、其店前ニ來リテ、鼻ヲ縫臺ノ上ニ
 差出シケルニ、縫工等ハ、縫針ヲ以テ、戯ニ
 其鼻ヲ刺シタレバ、象ハ直ニ其場ヲ去リ
 シガ、暫クシテ路傍ノ汚水ヲ鼻ニ含ミ、再
 ビ店前ニ來リテ、縫工數多並ビ居ル處ニ、
 彼ノ汚水ヲ吐キ出ダセシコトアリ、コレ
 前ニ針ニテ刺サレシ讐ヲ、報イシモノナ
 ルベシト云フ

第三十三 産物の歌

我ダ日本は温帯の 寒暑程よき氣候故
 海陸共に産物は 數々多き其中ニ
 先づ第一は米と麥 何處の地にも登る故
 三千七百餘萬の人 日々食するに餘りあり
 衣服ヲ作るは木綿絹 絹と蠶の糸にして
 生糸と稱へ外國へ 輸出の品の第一を
 是をよて織クし反物を 上州絹や西陣織
 仙台平や博多帯 甲斐絹加賀絹足利絹

錦縮緬縹子綴子 天鷲絨羽二重八丈縞
 木綿は畠よ作るもの 真岡木綿や奈良晒
 薩摩がすりに小倉織 鳴海しぼりや結城トマ
 麻布の種類も多けれど 越後縮の名ぞ高し
 茶と諸國よりづれども 山城宇治の珠よよく
 煙草と薩摩の國府より 長崎丹波水戸榛野
 此兩品は必用の 品よあらねど外國へ
 賣れもし國の人々も 好みて常よ用ふなり

其二

半紙と岩國土佐駿河 美濃紙奉書雁皮紙と
 さまくらりて外國の 紙よ比すれば品強し
 器物の中よ世界よも 類少きは漆器よて
 朱塗たぬ漆木地青漆 蒔繪ハ美術の一つなり
 銅器鐵器と諸國より 鑄出す數も亦多し
 陶器も尾張の瀬戸村も 多く出づればおしあべて
 瀬戸物とのみ唱ふれど 他の國よりも出ますなり
 又金銀の在る國を 佐渡よ岩代甲斐但馬
 石油は越後石炭は 筑後の三池など出でて

水晶瑪瑙の寶玉も 建築用の石材も
 病といやす薬石も 皆山國より出づるあり
 松杉檜の材木は 何處の地にも生ひ繁り
 埋木細工は陸奥より出で 神代杉ハ箱根山
 蜜柑ハ紀伊の名産よて 葡萄ハ甲斐よるしとを
 尾張大根秋田落 芳野の葛粉熊野蜜
 讃岐の砂糖阿波の藍 備後琉球二種の席

其三

まづ此外ハ海藻は 松前昆布淺草海苔

伊勢の鹿角菜ふどふで 何處も植物と稱へる
 鯨大なる海獸ふて 紀州沖よて捕へられ
 松魚は土佐の名産よて 土佐節の名を世に高く
 鮭ハ鮭を北海道 非常に漁る其數も
 數へ盡さん様もなく 皆日ハ乾かして出ださ
 鱈を下總行徳より 九十九里の濱へつけ
 多く網して干鱈とし 田島の肥料よ充つるふり
 其他伊勢鰻興津鯛 塩は赤穂よよるしとす
 酒を攝津の灘の酒 諸國よ積み出す樽數は

幾千萬の限りなく 東の都の新川よ
贈りて藏む酒倉は 河岸よ並ひて數知まじ
斯く數多き酒藏も 時小空しくなるまじと此
あまはさすがに東京ハ 人口百萬大都よて
人家つらなる賑はしき 土地よを思ひやられたり

尋常小學第四讀本 上卷終

